

キリスト者の挨拶

今日から、しばらくの間、フィリピの信徒への手紙をご一緒に読んでいこうと思っています。新約聖書は、マタイによる福音書から始まりヨハネの黙示録まで全部で 27 の文書からなります。そのうち 4 つがイエスさまのお言葉と業を記した福音書、それから弟子たちの伝道の記録である使徒言行録、最後のヨハネの黙示録を除いた 21 の文書が手紙・書簡ということになります。全体の分量からいえば福音書が大きいのですが、単純にパーセントだけ出せば、新約聖書の約 78 パーセント、乱暴な言い方をすると 8 割が手紙で占められていることになります。このことは何を意味しているのでしょうか。手紙というコミュニケーションの手段の特徴は差出人と受取人がはっきりしていることです。特定の相手に対して出す。その相手は個人である場合もありますし、集団である場合もあります。聖書に収められている手紙の場合は、フィレモンへの手紙を除いて、あとはすべて集団、すなわち教会あてのものです。つまり、新約聖書の構成は、主イエスのお言葉と働きを記した福音書、それを受継いだ弟子たちの働き、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」という約束通りの働きが使徒言行録に記され、その後、そうして各地域の生まれたばかりの教会に使徒たちがあてた手紙が収められている。つまり新約聖書の 8 割を占める手紙は、各地域における主に召し集められた群れの教会形成の記録なのです。それは呼び集められた者たちが神の民として歩むため、人格と人生と共同体を神の言葉によって創り上げていくためのチャレンジ、試行錯誤と闘いの記録であり、わたしたちに

も多くの示唆を与えるものです。手紙を読みますと、キリスト教の教えとユダヤ教の教えの違いなど教理として整理が必要だった部分や、食べ物や、着るもの、世間との付き合いの仕方など彼らの生きていた地中海世界の常識との違いなど、召された者として生きるために組み替えてゆかねばならなかった様々な事柄が記されています。新約聖書に収められている手紙はみな、洗礼を受けてキリスト・イエスに結ばれたわたしたちが教会に生きる民となっていくための指示、教え、ルールがまとめられたものなのです。このことをまず頭に置いておきましょう。

そして今朝一緒に読みましたフィリピの信徒への手紙は、使徒パウロが弟子のテモテと連名で、フィリピというギリシアのマケドニア半島北部の町に誕生したキリスト者の群れにあてた手紙になります。そこで手紙なのですが、皆さんは手紙を書く習慣はまだお持ちでしょうか。まずパソコンで打つメールが仕事では圧倒的です。スピードが違います。親しい間同士ではlineを使う方が多い。家族や、仲間同士のグループlineで情報をまわす。あれには写真や動画も添付できますから、すごい時代になったものだと思います。こうなると手紙はどんどん隅に追いやられてゆきますね。かろうじて絵手紙など、はがきに絵を描いて言葉を添えたものなどが逆に味があるというか、気持ちを伝えるものとして用いられるようです。残念ながら昔ながらの手紙が一番使い勝手のないところに落ち着くようになってしまいました。しかしパウロの時代、手紙は遠方にいる人間に情報や、気持ちを伝える唯一の手段でした。人を送る手もありますがその人がちゃんと伝えるかどうか分かりません。やはりその人にメッセージを託す形になるでしょう。すると手紙に頼らざるを得ない。思うに技術の進歩は人間のあいだの距離をどんどん縮めてきたのです。距離割る時間は速さですが、人の

足が、馬の速さに取って変わられ、のろしが使われ、太鼓が使われ、やがて電気が通るようになると電信、電報、やがて電話で直接声を届けることができるようになります。しかし、パウロの時代、距離は絶対的でした。距離が離れれば離れるほど心の距離も遠のきます。するとどうなるでしょう。似たようなケースとしてわたしが思い浮かぶのは病院に長く入院している方を訪問して感じたことです。そうした方々は本当に、はがきや手紙を繰り返し読んでおられますね。彼らは日常と隔絶した環境に置かれています。それはもしかしたら無人島に流れ着いた人が瓶に入っている手紙を偶然みつけて、それから毎日毎日海岸に出て、また便りが届かないか探しに行くのと似ているような気がします。移動できない現実、病気で体も心も弱るなかで、外から届けられた便りを支えとして繰り返し読む。フィリピの信徒たちも同じだったのです。なぜなら、彼らはキリスト者になったことで彼らが生きている社会から切り離されたからです。彼らはあきらかに地中海社会の基準からすれば異質な存在となっています。身分を気にせず集まり、女性にもしかるべき働きが割り振られ、町の至る所にあつた偶像を拜むことをせず、主イエスの教えと使徒の教えに則って、生活を律し始めた人々、そのことによってつまはじきにされたり、社会的制裁をもといた共同体から受けたりもしたでしょう。クリスチャンになると結婚できないと言われた方もみなさんの中にはおられるのではないのでしょうか。時代はキリスト教になれましたが、当事者として生きるとなるとさまざまに角が立つのが世の習いです。初代の信徒たちの受けた逆風はいかばかりかと思えます。このフィリピの信徒たちの手紙には後のほうに「わたしたちの国籍は天にあります」という有名な言葉があります。フィリピの市民であることよりも、天に国籍を持つ者として、彼らの存

在はキリストによって上書きをされ、神の国の生活様式をこの地上において生きる群れが誕生しているのです。このことはわたしたちも弁えておきたいことです。パウロも、繰り返しこの神さまによって与えられた新しい市民権について自覚するように求めています。そのことは今日ご一緒に読みました手紙の書きだし2節からも明らかです。彼はこう手紙を始めました。

「キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」

この書き出しには当時のギリシア社会の手紙の文化、書き方に則りながら、内容的には極めて特徴的な自己紹介がされています。まず差出人が誰であることを示し、つぎに受取人が誰であることを特定し、それから差出人から受取人たちへの挨拶が記されています。これだけのことにパウロはまるでお菓子に砂糖をまぶすように、たっぷりとキリスト・イエスによる香りづけをしています。差出人は「キリスト・イエスの僕パウロとテモテ」、受取人は「フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たち」です。お判りでしょうか。差出人と受取人を結び付けているのは「キリスト・イエス」です。キリスト・イエスに結ばれている者たちであることが共通の出来事、彼らの生きている現実のベースとなっている。そしてこれこそが距離にまさる新しい出来事だったのです。このフィリピの信徒への手紙が書かれたのはパウロが福音宣教の結果、牢屋に入れられていた時だというのは有名です。そのために獄中書簡などという呼ばれ方をすることもあります。ただその牢獄がローマだったのか、エフェソだった

のか、あるいはカイザリアなのか場所については学者によってかなり意見の違いがあるようです。いずれにせよ、空間的にフィリピとは異なった遠方において、しかも獄中にあることで物理的に移動を禁じられた状態にあるパウロが、フィリピの信徒たちと心を通い合わせることが出来たのはすべて、彼が記している通り「キリスト・イエスに結ばれている」というこの共通の土台によるのです。わたしたちはいま半田教会の教会堂で礼拝をしながら同時に別の場所に存在することは出来ません。人間は時間的、空間的に閉じられた存在であって物理法則のもとに生きているからです。しかし距離が絶対であったときに、神さまだけが時間からも、空間からも、物理法則からも自由な存在として彼らを結び合わせている。神さまの霊の働きとして、聖霊の現実とも言うべき出来事によって、この日曜日に日本各地の教会で、また世界の教会でもたれるこの日の礼拝において、神が臨まれるのと同じ仕方において結ばれているのです。この神さまの生き生きとしたご臨在を確信しているからこそ、パウロはこの手紙を書いているのです。獄中にあっても喜びをもって、生き生きと彼らの面影をよみがえらせながら手紙を書いている。そして、そのパウロが信じ、感じ、生かされているキリスト・イエスに結ばれていることによって与えられる新しい現実、いまフィリピの信徒たちを招こうとしているのです。わたしたちも現在、コロナウィルス感染症対策下にあっても距離を取らなければならない状況のもとにあります。わたしたちを越えたところにおられる「わたしたちの父である神」とわたしたちを召して下さったキリスト・イエスからの恵みと平和に守られていることを覚えて、この年の歩みを整えたいと願っています。

お祈りします。